

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

戦争中、戦闘機(せんとうき)(ゼロ戦)乗りにあこがれた得也(とち)たちは、工場の中にある戦闘機(せんとうき)の胴体(どうたい)(胴つばら)に「はやぶさ」と名付け、それで夢中になって遊んでいた。敗戦後、村にアメリカ軍の戦車がやって来て、「胴つばら」は目の前でぐしゃぐしゃにふみつぶされてしまった。

このあたりで往還(わんかん)はただ一本、かんたんな舗装(ほさう)をほどこした道である。

ところどころに穴ぼこができているが、それは土の道とちがって、ひとすじの未来が村に生じたようだ。

大人たちの話によれば往還は、戦争がはじまるずっとまえ、得也(とち)のとうちゃんが若いころにできたらしい。

何匹(ひき)ものみずすましが灰色の川を泳ぎまわる、そんな感じだった。灰白色の川は往還であり、下駄(げた)スケートをはいたこどもたちが、かちやつ、かちやつ、と音をたててすべっていた。

ふみつぶされた胴つばらの内には、手ごろな大きさの滑車(か)がついていた。こどもはその滑車をとりはずし、下駄にとりつけて往還をすべる道具をこしらえたのだ。

溜(ため)ですべるんよかあ、ずつとかんたんだな。つるつるの氷のうえはすぐ引っくりけるけれど、往還ですべるんは、やたらぶつたおれつことがねえ」と、となりの集落のガキ大将がいった。

こどもらが山あいの溜ですべるときは、かすがいを下駄にうちつけたのを使う。あるとき得也は、山奥(おく)に暮らす同級生の下駄スケートを借りてすべった。しかし三、四歩、足をはこんだとき、もののみごころんだ。

「すげえ滑車だ。こんないい滑車はいままでみたことがねえ。さすがゼロ戦の部品だな」

こう大人がいった。

まわるところに細かい玉がきれいにつまっており、指でまわすと、かすかな音をたてて速やかにまわった。じつに精巧(こうこう)なつくり、そして回転(くわん)ぶりに、得也もほれほれとした。

「なんで(A)おめは滑車のスケートをやんねんだ。ぼけつとみてるだけじゃつまんなかんべ」  
バツタ(注3)が得也に近づいた。

「滑車をとることができねんだんべ。トクもシンも半ばやろだかな。(B)おれがとったやつをくれてやんべじゃねえか」

かしゃつ、かしゃつ。

かしゃ、かしゃつ。

①みずすましたちは夢中である。

「(C) おれ、滑車なんかいらね」

「どしてだあ」

「いらねからいらねんだ」

「いじけてねえで、おもいつきりすべれ。きもちがいいど。ほれ、どれでも好きな滑車をとれ」

いくつもポケットからとりだしてバツタは得也にみせた。

こんなことは以前のバツタにはなかった。いつもいばりちらし、氣にくわないうことがあると、すぐ得也や真治の頭をこづいた。バツタがかわつたのは、とうちゃんが遺骨になつて帰つてからである。

だれもみていないと、夏の葉かげのような空気をただよわせた。②このため得也たちは、胴つばらの飛行訓練にさそつた。その折から、すこしバツタがかわつたのだ。

「引っくりけえつて頭あぶつんが、おつかねんか」

「そうじゃねえ」

「じゃあ、なんでスケートやんねんだ」

③おれ、どうしてもやりたくねえ」

みんな滑車はただの部品だとおもっている。だから下駄にくつつけ、そのうえに乗つかつてすべる氣になれるんだ。でもおれは、そんなこたあできね。滑車は胴つばらの一部、はやぶさの体の一部なんだ。そいつを下駄にとりつけ、ふみつけるようにして使うだなんて、おれにはできねど。

新聞だつてそうじゃねえか、と得也はおもつた。字が書いてある紙は尊く、もし疊のうえに新聞がひろげてあつたりすると、それをふんであるくとばちがあたる、と年寄りがいうじゃねえか。

たとえ小つけ滑車でも、おれにとつちや字を書いてある新聞とおんなじだ。

# （ 中 略 ）

「ううん……いい湯だったあ」

ゆうべ、とうちゃんは風呂からあがり、くつろいだ表情で上がりはなに腰かけた。

裸の上半身はゆでだこのようだ。それをみて得也は、このごろいくらか肉がついたみてだな、とおもつた。太田から帰つたばかりのころは、やせて胸の骨がういていたのである。

「あんたの好きなおつ切り込みだがね」

夕食をこしらえるかあちゃんがいった。

幸介叔父さんの家からきのこをとどけてくれた。いっばんしめじ、むらさきしめじ、ししぎのこ、このはつかぶり、ねずみたけ、と雑多なきのこである。

「うどんはさ、うんと固めにぶつたよ」

おつ切り込みは、いつてみれば煮こみうどんである。具の野菜はなんでも手にはいるやつを放りこみ、みそ味で、ぐつぐつ煮こむのだ。

土手に腰をおろす得也は、まえの晩、家族みんなで囲炉裏をかこんだときのことか頭をかすめた。

とうちゃんは電挽場ではたらけるようになった。いまんとこは体ならしの作業らしいけど、それでも給料をもらえるんだから、かあちゃんは大助かりだ。

落下傘の糸をこさえる燃り工場は、仕事がなくなくなつちまつて……だけんど電挽場でとうちゃんの仕事のはじまつたから、かあちゃんはほつとしたみてだ。

「さあ、できたど」

うどん、みそ、きのこ、それらが煮えた香りが家じゅうにただよう。得也は生つばがわいた。

かあちゃんが家長の腕にさいしよによそつた。

「おお、うめえ」。とうちゃんの顔がほころぶ。「おんなじおつ切り込みでもきのこ入りは、なんともいえねなあ」

得也も腕によそつてもらい、

「おれ、このしゃきしゃきが、いっとう好きだど」

雑多なきのこのうち、いっぼんしめじの菌ざわりは格別だった。むっちりとしたうどんの食感と、きのこのしゃきとした菌ざわり、そのかねあいがたまらない。

ゆき子も、ふつ、ふつと、すぼめた口で碗の中身をふきながら箸をうごかす。

かあちゃんは自分で食べるあいまに、箸でちぎったうどんを冷ましつつ小さな弟にあたえた。

鍋をかけた囲炉裏の火はまだもえている。得也はここに深い温もりが生じていた。それはまた途方もなくひろい温かさである、と感じた。

「電挽場じゃあ体のあんべえはどうかね」

かあちゃんがいった。

「おもったよかあ足がうごくど。このまんまいきやあ、まえみてに製材をやれつようになるんに、あんまり日数はかかんねだんべ」

なぜか得也は、おれがちのとうちゃんとかあちゃんは仲がいいんだなと、そんな気がした。いつもおたげえに気づかっているがな。

よそんちはどうなんだんべ。友だちのシンちゃんちは……ふかし芋をくれたりするおばさん、歌をうたうのが好きなおじさん……うん、たぶん仲がいいんじゃないかねえか。

じゃあバツたんちはどうか。桶職人のおやじさんは戦死しまったけど、出征するめえはどうだったんかな。

とうちゃんが太田へ徴用されるまえ得也は、あまり両親について考えたことがなかった。けれど、しばらくとうちゃんが家をはなれ、こうして帰ってきたいま、なぜか④親たちをみる目がかわつたのである。

「さ、たとえ」

かあちゃんは自分の箸をうごかすのよりも、家族のために、しゃもじを手にすることで忙しかった。

土手に座って、色々なことに思いをめぐらしている得也は、出征して、やはり無事に村に帰ってきた大尉さんの姿を思い出す。大尉さんは、毎日、作物も何もない畑を耕し続けている。その様子を見た得也は、大尉さんは何かを忘れようとしているのではないか、あるいは何か大事なものを

のをさがそうしているのではないかと感じる。

「もうすぐだなトクちゃん、鎮守さまの祭りは……」

土手にいる得也をみつめて真治がやってきた。ならんで腰をおろし、じだんぼ山のふもとの森へと目をやって、

「屋台で売るべつこうあめ、早くなめてえな」

「おれは芋でんがくが食いてえ。ちつとんべこげたさと芋に甘みそをつけたんは、ほつべたがおっこちるがな」

多くのグラマンやB29がとんできても鎮守さまの祭りは細々とおこなわれた。けれど今年の祭りは、かつてのようになぎわいをすこしはとりもどすのではないか。村の人々はみな、こころ待ちにしたのである。

はるかに遠い先祖たちのところからつづく祭りだ。稲田がこがね色に染まる季節、ちゃんと祭りをやることで村人は、それぞれがほつと安らかになれる。

「鎮守さまの祭りがすみやあ、すぐ町のえびすこだ」と真治はたちあがり、西にある町のほうをながめた。「とうちゃんといっしょにいぐから、トクちゃんもきねか」

真治が口にするのは恵比須講である。まだ得也はいったことがなかった。鎮守さまの祭りよりもはるかに盛大らしい。ぜひいつてみてえ、と県境をなす流れのむこうをみた。

すこしたったとき真治が、

「あれっ、またしらさがきてやがる。あいつ、たあだ水ぎわにつたつて、なあんもしねえ。まったく役たたずだな」

河原の雑草はいくらか色づき、このごろは雨がないので水はすんでいた。

しらさぎの白さがきわだち、まるで一輪のまっ白い花が水辺に咲いたようである。

得也がながめていると、ふわつととびたつた。

純白の花びらが宙にまいはじめた、と得也は感じた。

「しらさぎのやろ、どうしたんだんべ」

真治の声がかわつた。

ふだん川面すれすれにとぶのに、高い空へとまいのぼっていくのだ。

じつにきもちがよさそうである。

あいつ、はやぶさみてじゃねえか、と得也はおもった。じだんぼ山に住むはやぶさは、川つぺりを這いずりまあるみてなとび方はしねえ。とまってる木の枝をいつぺんはなれたら、いつきに高けえ空をめざすぞ。

やろめ、はやぶさのまねでもしてるんかな。花びらはさらに上昇する。それを目にする得也は、ふと、純白の羽ばたきが本物のはやぶさのような気がした。

つぶてのうにえものにせまる速さ、ねらったものをつかむあらあらしい爪、とらえたえものを切りさく鋭いくちばし、これらを投げすてて、なにもしない自分になろうとしているのか。

空き工場の胴つばらで練習をしていたころ得也は、いつもはやぶさのきもちにひたった。だからいま、まっ白なはやぶさと化してはるか上空から村や山や川を、あるいはずっと遠いところを、ゆったりとながめるこころになれた。

はやぶさをまねた胴つばらは鉄のくまがい(注8)にふんづぶされて、あとかたもなくなっちゃったし、もちろんめざすもんもなくなつたぞ。ならば、じだんぼ山のお手本のはやぶさだって、いつもみてな荒つぽいこたあやめて、のんびりと、しらさぎになりきっていいんじゃないか。

だれにもさしずされねで、ふわありふわあり自在にやるんだ。

高い空をみあげて得也は、きもちが大きくなっていくのを感じた。

「えびすこは汽車でいぎてえな」

と真治がいった。

「おれもだあ。バスじゃつまんね。いせいのいい汽車がいいぞ」

しらさぎはまだ高きへとまいつつける。

その空はぬけるばかりに青かった。

白い点は小さくなっていたけれど得也の胸の内では、かぎりない大きさを保っていたのである。

(大屋研一『のめっこ少年戦中紀聞 子供も戦争だった』〈三五館〉)

(注1) 往還……人や車が行き来する道。街道。

(注2) 溜……ため池。

(注3) バッタ……少年のあだ名。

(注4) 上がりはな……家のげん関などの土間より一段高くなったところ。

(注5) 電挽場……電動のこぎりで木を挽く製材所。

(注6) グラマン……アメリカ軍の戦闘機。

(注7) B 29……アメリカ軍の爆撃機。

(注8) くまがい……アメリカ軍の戦車。

(注9) お手本のはやぶさ……得也たちがゼロ戦のまねをするときに、お手本にしていたはやぶさ。

問一 〰線部(A)「おめ」(B)「おれ」(C)「おれ」はだれをさしますか。その組み合わせとして最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

- |   |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|
| ア | A——バッタ | B——バッタ | C——得也  |
| イ | A——バッタ | B——得也  | C——真治  |
| ウ | A——得也  | B——バッタ | C——得也  |
| エ | A——得也  | B——真治  | C——バッタ |

問二

——線部①「みずすましたち」とありますが、これは何を表していますか。本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問三

——線部②「このため得也たちは、胴っぱらの飛行訓練にさそった」とありますが、これはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア やさしくなったバツタを以前よりも好きになったから。

イ 訓練にはバツタがいないと面白くないということがわかったから。

ウ どこことなくさびしげなバツタを元気づけようとしたから。

エ ひとりで生きていこうとするバツタの強さにひかれたから。

問四

——線部③「おれ、どうしてもやりたくねえ」とありますが、得也がそう思うのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問五

——線部④「親たちをみる目がかわったのである」について。

(1) 得也が自分の両親をみる目は、どのように変わったのですか、説明しなさい。

(2) なぜそのように両親をみる目が変わったのだと考えられますか、説明しなさい。

問六

戦争の体験を通して「はやぶさ」・「しらさぎ」に対する得也の気持ちはどのように変わりましたか、八十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権上の都合により未掲載

著作権上の都合により未掲載

著作権上の都合により未掲載

(注1) 第一章……ここに掲載してある本文は『女子マラソン どうして強くなったのか』の第三章の一部です。  
(注2) ウェイト・コントロール……体重を適切な状態に調節すること。  
(注3) ローカロリー……カロリーが低いこと。

問一 ―線部①「男子の実践が土台となり、それをアレンジするところから出発したのです」とありますが、その結果、現在行われている女子マラソンの本格的なトレーニング方法とはどのようなものですか。※の部分(「それにしても」整備されてきました。こ)からわかることを、具体的に二点答えなさい。

問二 ―線部②「二〇世紀に入ると、参政権に代表されるように女性の権利の拡大が実現し、男女同権の社会観・価値観が出来上がってきたことがあります。社会の変容によって、女性もトレーニングやレースで個性を発揮できる機会が増え、環境も整備されてきました」とありますが、変容する前の社会では、女性に対するどのような考え方が存在していたのですか。それがわかる一文を本文中から探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問三 ―線部③「体脂肪量をぎりぎりまで落とし込んだ短距離ランナー、たとえばカール・ルイスには、おそらくフルマラソンを走るのは困難なのではないでしょうか」とありますが、なぜ困難なのですか。「グリコーゲン」、「体脂肪」ということばを使って、その理由を百字以内で説明しなさい。

問四 ―線部④「ひとつには、『何を食べるか』。そして、『どのようなタイミングで食べるか』、また『どのような組み合わせで食べるか』です」とありますが、そのことについての筆者の考えを次の表にまとめました。(A)と(C)にあてはまる語句を答えなさい。

|       | 考え方              | 長所                                                             |
|-------|------------------|----------------------------------------------------------------|
| 主食    | ごはん(玄米・強化米)を食べる。 | ・(A)。<br>・インシュリンの分泌を刺激しないため、脂肪が蓄積されにくい。                        |
| タイミング | (B)。             | ・夕食で必要以上に栄養分を吸収することはないので、脂肪が蓄積されにくくなる。<br>・消化吸収やホルモン分泌が効率よく働く。 |
| 組み合わせ | 主食に(C)を組み合わせる。   | ・満腹感が得られる。                                                     |



問五 — 線部⑤「一石二鳥」とありますが、この場合どういことですか。「一石」・「二鳥」にあたるものを明らかにして説明しなさい。

問六 本文の内容に合っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 企業がイメージアップをはかるために若いスポーツ選手を育成した結果、国際レースで活躍するトップレーサーの多くが若い世代になった。
- イ スポーツが気軽に楽しめるものになり、スポーツ人口が増え、また施設も整えられてきたため、結果としてトップランナーが現れる可能性も高くなった。
- ウ 最近になって日本人は米を「減量の敵」と考えるようになったため、欧米型の食事でウエイト・コントロールを行うようになった。
- エ マラソン選手がレース当日に二人分の食事を取るのは、フルマラソンのレース中に二人分のエネルギーを消費するためである。
- オ かつてはやせてさえいれば美しいという考え方が主流だったが、現代では筋肉質であることにも美しさを見出すという考え方に変わってきた。
- カ 女子マラソンの選手育成は、ウエイト・コントロールの面でも男子マラソンの長い実践を応用できたので、順調な成長をとげてきたといえる。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 幼なじみとのキユウコウをあたためる。
- (2) この道具にはチヨウホウしている。
- (3) 日本記録をジュリツした。
- (4) カンダンの差が激しい。
- (5) 私はこの件に一切カンチしない。